

天声人語

評論家の大宅壮一は「クチコミ」「恐妻」など多くの造語を生んだことで知られる。草創期のテレビを擲論した「一億総白痴化」も流行語になった。この最新のメディアが人々の興味をかき立てるだけの存在になるのでは、という警告だった▼いま大宅がいて、インターネットを見たなら何と云うだろう。「案外、なじんでいたんじゃないでしょうか」。そう話すのは「大宅壮一文庫」の鴨志田浩さん(50)である。大宅の蔵書を引き継いだ私設の雑誌図書館で、30年以上働いてきた▼鴨志田さんが見る限り大宅の情報への接し方は、ネット検索を先取りしていた。「書物は読むよりも引く」との考えから、記事の内容をカードに書き出して項目で分類していた。それを発展させたのが現在78万冊を擁する大宅文庫の索引である▼筆者が主にお世話になったのは、女性週刊誌の編集者だった1980年代末である。社会や風俗の貴重な情報源だった。しかしネット検索に押される現在、往年の隆盛はないようだ。財政難を何とかしようと、ネットで運営資金の募集を始めた▼2・26事件直後の月刊誌を閲覧してみた。破れそうなページをめくると、発生效后数日の様子が報告されている。飛び交う噂。緊迫するラジオ放送。81年前の息づかいがあった▼「ネットにない情報は、存在しないものとして扱われる。そんな世の中にはなあってほしくない」と、鴨志田さんは言う。大宅文庫に限らない。図書館にたずさわる人たちに共通の思いだろう。